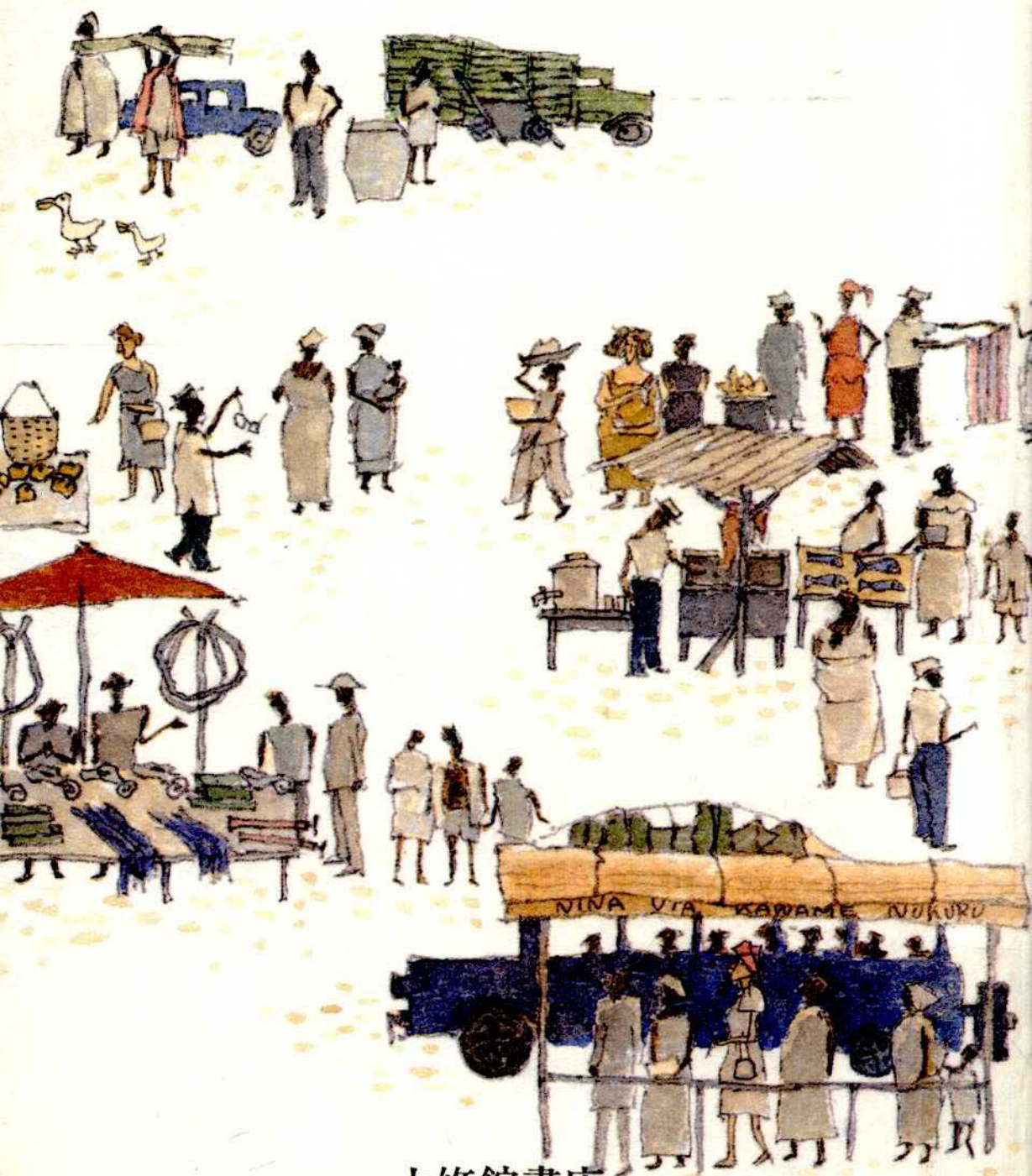


ことばを追って

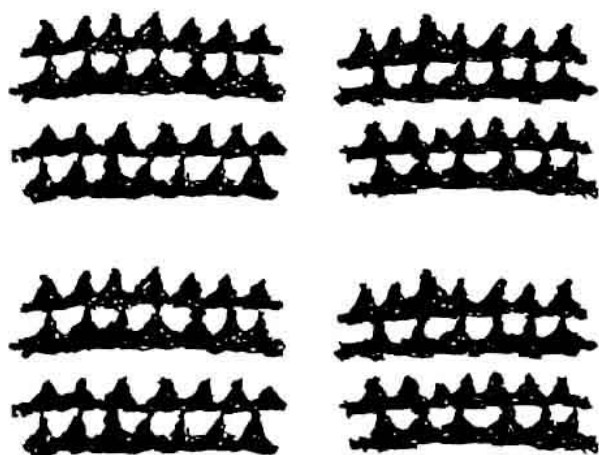
西江雅之著



大修館書店

ことばを追って

西江雅之著



大修館書店

著者略歴

西江雅之（にしえ まさゆき）

1932年東京生まれ。早稲田大学政経学部卒、文学部英文科卒、大学院芸術学科修了。後フルブライト留学生としてカリフォルニア大学大学院にて言語学、文化人類学を学ぶ。主にアフリカを中心とする言語、文化の研究に従事。現在早稲田大学文学部教授。

著書『花のある遠景』（旺文社文庫）、『旅人からの便り』（リプロポート）の他、「講座・言語④」「言語の芸術」、「同講座⑥」「世界の言語」（ともに共著。大修館書店）、など。

ことばを追って

© M. Nishie 1989

1989年2月20日 初版発行

定価1600円

検印
省略

著者 西江 雅之
発行者 鈴木 荘夫

発行所 株式会社 大修館書店

(101) 東京都千代田区神田錦町3-24

電話東京 (294) 2221 (大代表)/振替東京 9-40504

印字・製版・印刷・製本／図書印刷

ISBN4-469-21152-4

Printed in Japan

ことばを追って ■ 目次

I 顔のある木の思い出

〈顔のある木〉の思い出 5

スワヒリ語と私 12

私が外国語と付き合った理由^{わけ} 15

温度のない水 20

チョムスキーの思い出 23

わたしの空想学校——南方熊楠 28

カリブの旅から 32

散歩道としてのデパート 47

II アフリカから

アフリカの社会人の会話〈多言語使用〉 69

アフリカの言葉あそび〈なぞなぞを中心として〉



東アフリカのなぞなぞ 113

引けない辞書 121

スワヒリ語訳『水戸黄門』 136

スワヒリ圏の文学 139

ドラム・ランゲージ 143

名付け 147

III “伝え合い”の言語学

敬語の文化人類学 153

言語と文化へ“赤”について 167

“伝え合い”としての“体” 182

“伝え合い”と空間 201

“食べ物”と言語調査 222

音・声・音声へアフリカで口承伝承から学んだこと



“ことば”と“コミュニケーション”

248

意味の芯 267

ピジン・クレオール諸語 272

初出一覧 288

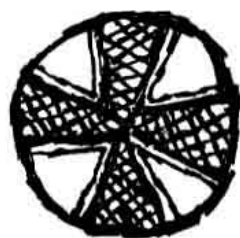
あとがき 289



ことばを追って

装幀・カット 村井宗二

I
顔のある木の思い出



へ顔のある木」の思い出

ケニアでわたしがキクユ語を学びはじめた頃、ナイロビの裏街のちっぽけな本屋で偶然に *Harumbee Tithome* という本を見付けた。それは薄汚れた黄表紙の教科書で、ほこりっぽい棚の上に他の安っぽい本と混ざって積み重ねられていた。

「キクユ語で書かれた教科書などはありませんよ」と、目抜き通りにあるいくつかの本屋では、ヨーロッパ人の店番のおじさんにいつも冷たく言われ続けていた後だったので、その本を見付けた時は嬉しかった。

その本のタイトルは日本語に訳せば、「ソーレ！ みんなで読もうや」とでもいうのだろうか。これは子供、大人にかかわらず、その土地にはザラにいる文盲である人々に読み書きを教えるための教材だった。

本屋のすぐ近くにはカントリー・バスのターミナルがあった。その広場には、日本でならば

とつくに屑鉄工場にでもほっぽり出されてしまっているはずのポンコツのバスが、現役を立派につとめて幾台も集まっている。そして、ペンキもはげたその車体のまわりを、アフリカの人々が文字通り黒山となつて取り囲み、埋めつくしている。

バスは出発時刻が過ぎると、おもむろに出発の準備をする。すると、ボロをまとつた元氣の良い少年たちが、どこからかそのバスのそばに集まつて来て、どういうわけか車体を太い木の枝で無闇やたらと叩きはじめた。馬にムチを打つかのようなその振舞いと、それに伴う騒音は、その場に馴れない他所者を仰天させるに充分だった。

わたしは買ったばかりのキクユ語の本を持って、友人の所へ行つてみようと思いついた。その青年はバス停のはずれにゴザを敷いて、その上に安物の下着やシャツ類をごたごたと並べて売っている。

赤、青、オレンジ、黄色、等々と店はまるで色の見本市となつている。そして、その色の質や染め具合の悪さにもかかわらず、ナイロビの底抜けに澄み切つた空の下では、それはまさにお祭り会場に飾りたてられた新品の万国旗であり、その青年や、ゴザの前で足を停めるボロをまとつた男達や女達も、その輝かしい陽光の中では氣位の高い王侯貴族の類いと変わらない。

彼が働く小さなゴザの店の横に腰かけると、「とうとう見つけたよ」とわたしは言つて、買い

たての教科書を見せた。すると、とつくに二十歳を超えているこの友人は、「どれ、俺にも読ませろよ」と言つて、堂々たる黒い体をゆつくりと前後にゆすぶりながら、そこに書かれている文字を、ポツリポツリと一つ一つ拾いながら読み始めた。ややかすれた、低くて太い美声を響かせながら、「ハ・ラ・ンベ・エ・トゥ・ゾ・メ」とやりだしたのだ。

そして、数ページ目に行ったとき、微笑む薪木の挿絵を見つけてわたしがドキツとしたのにも気づかずに、彼は、店の仕事もそっちのけで、文字の世界に没頭しきっていたのだった。



三十年も前には、ソマリア国には文字が読める人はほとんど皆無に近かった。それでも砂漠に取り囲まれた小さな首都には本屋があり、そこで本を買い、文字を読む人がある程度はいたようだ。ただし、ソマリア語には当時はまだ一般に使用される表記法がなかったので、本はすべてイタリア語か、またはアラビア語のものであった。従つて、文字と言えばローマ字か、アラビア文字を指していたのだ。

アラビア語の本は、ほとんどイスラム教関係の本と決まっている。だがその中にもアフリカで使うアラビア語学習の教科書が何種類かは混ざっていた。わたしはそんな本を買つて来ては、

宿の近くの人々を訪ね、遊び半分に文字を習ったり発音を習ったりしてひまな時間を過ごしたものだ。

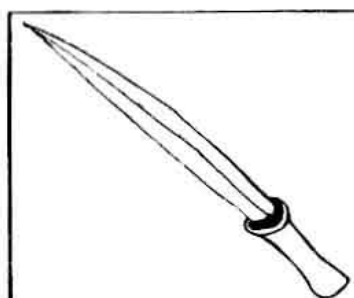
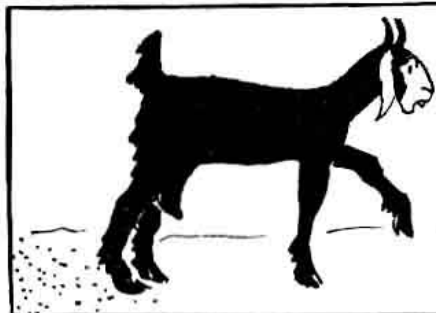
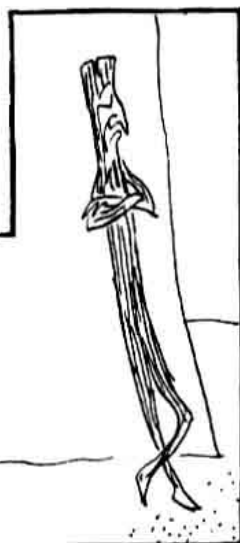
わたしがその町を去る時、そのような本のほとんどは近所の子供達に分け与えて来てしまった。だがどうしても手離す気にはなれずにいたものもあった。当時の状況では日本に無事に着くかどうか当てにはならなかったが、その町から送り出した本も何冊かあったのである。

そのうちの二冊が今も手元に残っている。一冊はアラビア文字の学習と、コーランの読み方の初歩を教えるための薄っぺらな教科書なのだが、その内表紙に描かれている絵が、もう三十年も以前の砂漠の中でのわたしの生活に、強烈な新鮮さを与えてくれたのだった。

その土地では、寺院の中では確かに絵画のような文字が壁で暴れ回っていたし、忙漠とした宇宙基地のような砂漠の中の町で、文明の利器のようなものをなに一つ見ないでひとりで生活をしていれば、都会への想いがこうじて、寺院の床の下に飛行機が飛び、汽車が走り、船が浮かんでいる別の世界があっても決して不思議ではないという気にもなっていくのだった。

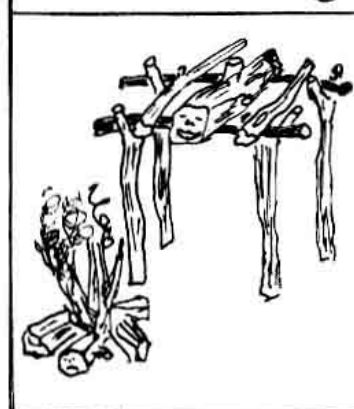
実際、ある夜は、静かな闇の中の小さな石造りの家で寝ていると、石壁の向うに広がる広漠とした砂漠の彼方から、突然わたしの部屋に向けて驀進して来る列車があるのに気が付いて、飛び起きたものだった。それは数頭のロバが、背に乗せた水入りのドラムカンを激しく揺さぶ

〈顔のある木〉の思い出



rūhiū

rū



rūkū

ra ro

re rĩ

〈顔のある木〉の教科書から(上2点はソマリ語、下はキクユ語のもの)

りながら近付いて来る時の音だった。汽笛のかわりに、この世の最後を告げるような悲痛な叫び声が、闇の中のその方角から湧き上がったので、わたしはそれが汽車ではなくて、背に荷物を山積みしたロバの声だということがわかったのだ。



もう一冊の教科書は、黒光りがする端正な顔の少年と共に読んだ。崩れかけた石の扉に腰かけて、元気一杯に描かれた挿絵を楽しみながら、わたしはその少年の黒くて細い指先を追いながら、一緒に声を張り上げて文字から音を拾い出していた。

すると文字は音となり、音はラクダとなり、ライオンとなり、ヒツジとなってわたし達の心の中を走り回った。その前日のラクダ市で、一頭の暴れラクダが、まるで深海に住むという海蛇の化物そのものを思わせる頭を不気味に振り回しながら、大きな歯をむき出して通行人の肩に噛みつきかけた。皮をはがれたばかりで、まだなま、暖かさがそのまま残っているような新鮮な色あいの肉塊を、裏の枯れ木にさらしているヒツジがいた。そんな光景が、次々にわたし達の心の中にとび出して来て、文字を拾い、絵を読みとっている少年の姿が、わたしの前から消え去った。